

いのちと地域を守る

組織の枠超え つながり深く

地震火災を想定して東京都墨田区曳舟地区で行われた避難訓練の後、参加者14人が同区のすみだホールにて集まり、訓練の成果や課題を語り合った。区や町内会(町会)、社会福祉協議会、まちづくり団体など多様な立場の人がそろい、活発に意見交換。「災害に備えるには組織を超えた連携が大事」との認識を共有した。

参加者は訓練を振り返り、「災害時は「家の倒壊で通常の混乱で消防機能がまひする避難経路が通れないかも」。消火を期待せず、まずは自力で避難する」と「強風による飛び火で炎に囲まれる可能性を考えると、避難方向から火の手が迫る火災に対し、指定場所への避難で十分」との懸念も示され、複数を想定しておく必要性を確

認した。阪神・淡路大震災で2人の弟を亡くした神戸市長田区の介護施設職員柴田大輔さん(29)は、木造住宅密集地域で起きる地震火災の恐

ろしさを証言。「災害時は混乱で消防機能がまひする避難経路が通れないかも。消火を期待せず、まずは自力で避難する」と「強風による飛び火で炎に囲まれる可能性を考えると、避難方向から火の手が迫る火災に対し、指定場所への避難で十分」との懸念も示され、複数を想定しておく必要性を確



避難したルートを確認し合う「むすび塾」の参加者

複数の避難ルート想定を

塚千恵子さん(55)は「とても心強い。つながりを深めたい」と語り、町会などから「今後一緒に訓練したい」「今回構築した関係を生かしたい」と相互協力を誓う発言が相次いだ。地域の避難訓練に地元事業所や保護者らの参加を促す声も上がり、祭りなどをきっかけに関係を深めていくことが提案された。東洋英和女学院大の桜井愛子准教授は「地域団体同士の連携強化に向け、今回のむすび塾でスタートラインに立った意義は大きい」と評価。東大生産技術研究所の加藤孝明准教授は「地域で互いに協力したい」という潜在意識はあるはず。まずは二スや経験を共有する場をつくるのが大事だ」と助言した。

震災の語り部から

旧門脇小(石巻市)元校長

鈴木 洋子さん (66)
=石巻市



平素やっていることが、いざと避難訓練を重ねていました。こういう時に命を守ります。東日本大震災当時校長を務めていた石巻市に「素早く整列する」「教師の話をしっかり聞く」という指導に加え、地震や津波を想定した

時に門脇小児童たちは、高台を求めて3回避難先を変えました。避難経路や場所を複数設定する上で、地域の協力は欠かせません。地元で地理や地形に詳しい住民の知恵を借り、防災に生かしたいです。今回の避難訓練では曳舟という地名の由来を住民から聞き、(海抜が低く、水害のリスクが高い)この地域の地理や歴史の一端を学びました。地域連携の重要性を実感しました。

石巻小大川小6年だった妹を亡くした大学生

佐藤そのみさん (21)
=東京都練馬区



東日本大震災当時、石巻市大川小6年だった妹を津波で亡くしました。妹の死は今も受け入れられず、津波は全く予想していませんでした。振り

も重要でしょう。大川小では津波が到達しなかった裏山への避難を提案した児童がいたと聞き、民がどう交流するかが課題かもしれません。学校の管理下で多くの犠牲者が出た悔しさは消えませんが、いくら嘆いても失われた命は戻りません。誰も同じ思いをしないよう、語り部として防災の大切さを訴え続けたいです。

気仙沼市の水産加工会社係長

藤本 考志さん (40)
=気仙沼市



東日本大震災の激しい揺れの中、同僚と目が合いました。その瞬間、「行くか」と含み笑い、私

私も震災前に同僚とどう参加。手が足りないことや助っ人の役割を知っており、だからこそ揺れの中でも保育所のことや頭に浮かび、体が自然と動いたのです。犠牲が出た現場と、防げた現場の違いはどこにあるのか。震災の訓練を皆さんも考え、訓練を重ねて備えてほしいと思います。

弟2人を失った介護施設職員

柴田 大輔さん (29)
=神戸市長田区



阪神・淡路大震災が起きた22年前の1月17日早朝、下から突き上げるような強い揺れに襲われまし

た。両親と弟2人の家族5人で寝ていました。約6時間後に小学1年だった自分が救出され、続いて父、母と助け出されましたが、自宅は火に包まれました。焼け跡から弟

振り返って

地震火災東北でも備え不可欠

阪神・淡路大震災で激しく揺れた神戸市内の民家。95年1月17日



東日本大震災の体験や教訓を振り返り、専門家と共に防災や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1591。次回のむすび塾は29日、多賀城市で開催します。

地震で津波と共に最大級の警戒を要するのが火災だ。迅速に避難しないと逃げ遅れ、迫る火の手に囲まれてしまう。首都直下地震が予想される東京・墨田区で開いた「むすび塾」では、住宅密集地域で起きる地震火災の恐ろしさを学んだ。早期避難が大切な津波と同じ。東日本大震災の被災地でも地震火災への備えを進める必要がある。今回は、河北新報社が2014年に始めた地方紙共催によるむすび塾として初めて、阪神

政府による首都直下地震の被害想定では、最悪のケースで1万6000人の焼死者が出る。津波被災が中心だった東日本大震災でも焼死者は150人近くに及んでいた。いつたん起きれば、大惨事に直結する地震火災。つらい犠牲を繰り返さないため火災対策への意識を高め、家電やガス機器の点検、家屋や家具の倒壊防止などに家庭、地域ぐるみで取り組むたい。(防災・教育室 藤田和彦)